

# カリフォルニア州のコミュニティ・カレッジにおける親教育 — グレンデール・コミュニティ・カレッジを中心に —

藤井美保

## Parent Education at Community Colleges in California State — Specifically Glendale Community College —

Miho FUJII

### Abstract

Although people technically become parents by having children, being parents biologically is not equal to being able to bring up children easily. Just like children, parents have to develop their parenting step by step through their experiences of raising their children. Parental development does not mean mere learning of knowledge and skills from child-rearing manuals. They develop their parenting through various interactions with various people, for example, children, relatives, other parents, neighbors, school teachers and other professionals, and so on. They have to remake their parental roles according to their children's development. It is a long and comprehensive process.

The purpose of this research is to study parent education at community colleges in California State in terms of support for parental development in modern society. Specifically, parent education in Glendale Community College will be considered as a case. This research will clarify the characteristics of parent education at community colleges and some suggestions for parenting support in Japan will be obtained.

**Key Words:** parent education, parental development, parenting support, community colleges

### はじめに

アメリカのコミュニティ・カレッジは公立の短期の中等後教育機関であり、地域住民の様々な教育ニーズに応えることを目的とする、地域社会のための教育機関である。コミュニティ・カレッジにおいては住民を対象とする多様な教育が提供されているが、その一つに親教育がある。本研究は、現代における親の発達をいかに支援するかという観点から、アメリカ・カリフォルニア州のコミュニティ・カレッジにおける親教育について考察するものである。

現代の日本においては様々な子育て支援活動が展開されているが、最近はその「支援の本質」が問われはじめてきた。従来型の子育て支援活動は「子育ての楽しさへの気づきや家庭の養育機能の向上をもたらすのだろうか」(大戸, 2008)という疑問が出はじめているのである。

本研究においては、まず初めに親としての発達を促す子育て支援の必要性について述べ、日本の子育

て支援の動向について整理したうえで、今後の子育て支援や親支援はどうあるべきか、その方向性を探るための一助として、カリフォルニア州のコミュニティ・カレッジにおける親教育について検討してみたい。具体的な事例として、グレンデール・コミュニティ・カレッジにおいて提供されている親教育プログラムを取り上げ、その内容や方法について考察することによって、コミュニティ・カレッジにおける親教育の特徴を明らかにし、そこから日本の子育て支援・親支援のあり方に対する示唆を得ることを目的とする。

### 1. 親としての発達と子育て支援

人は子どもを産む(持つ)ことによって親となる。しかし、生物学的に親になったからと言って、だれもが親としての役割をスムーズに果たせるとは限らない。子育ての能力、言い換えれば親役割の実行能力は生まれつき備わっているといった性質のもので

はなく、男女にかかわりなく、親として子育てをすることで学びとり、習熟していくものである。「親は子どもによって育てられる」とか「育児は育自」などと言われるが、子どもが大人へと発達していくのと同様に、親も子育てを通じて親として発達していく存在なのである。

ここでいう「親としての発達」とは、育児書等に見られるような単なる子育てスキルの伝達・獲得にとどまるものではない。子育ての状況において出会う様々な人々（自分の子ども、自分の親やきょうだい、子どもの教師や保育士、他の子ども、他の子どもの親、近隣住民など）との相互作用を通じて、親自身が親役割を認知し遂行しながら発達を遂げていく一連のプロセスである。それは、親になる以前の体験とは全く異質な体験を通じて、他では得られない多くのことを学びとる人格的社会的発達（柏木、2003）なのである。また当然のことながら、子どもの成長・発達にともなって親役割は様々に変化していくし、さらには家族を取り巻く社会の変化に対しても適応しながら親役割を再形成し、遂行していかなければならない。親としての発達は、長期的・連続的で包括的なプロセスなのである。

かつては、こうした親としての発達が問題にされることはほとんどなかった。子育て期の親たちに対して、祖父母をはじめとする親族ネットワークが子育てにかかわる様々な知識や技能、文化を伝達し、また地域社会における近隣ネットワークが直接的または間接的に子育てを支援する中で、親たちは時に悩みながらも親としての役割を認知・遂行し、親としての発達を遂げていたと考えられる。

しかし、社会環境の大きな変化により、子育てに携わるというだけでは親としての役割をスムーズに獲得・形成し、遂行していくことが困難となってきた。核家族化、少子化、近隣関係の希薄化、情報社会の進展による雑多な育児情報の氾濫、子育てに関わる社会規範の混乱・喪失など、現代社会は親が親としての役割をスムーズに遂行し、親として発達していくのに十分な環境であるとは言いがたい。こうした状況のもと、現代の親の発達をいかにして支援するかといった観点での子育て支援・親支援が実践的課題として認識されるようになってきた。

## 2. 日本の子育て支援の動向

### (1) 少子化対策としての子育て支援

わが国において1990年代以降に実施されてきた子育て支援は、基本的には少子化対策の一環として位置づけられる。女性の社会進出が進み共働き家族が

増加するなかで、十分とは言えないまでも育児休業法により働く女性の仕事と育児の両立支援が図られたし、保育所の増設や延長保育の促進、放課後児童クラブ（学童保育）の拡大など、女性が働き続けながら子育てをしやすい環境をつくることによって何とか少子化をくい止めようとする施策が打ち出されてきた。これらの施策は、働く女性の子育て負担を保育サービスの量的拡大によって軽減するといった方向での子育て支援策であるといえる。

他方、仕事を持たない専業主婦を対象とする子育て支援も登場してきた。それは、子育てサークルの育成や子育てから一時的に離れてリフレッシュを図るための一時保育など、核家族化や地域社会の崩壊のなかで孤立化し、子育てを一手に担わされている母親たちの育児不安や負担感を軽減し解消しようとするものである。

共働きの母親を対象にするものであれ、専業主婦を対象にするものであれ、少子化対策としての子育て支援事業は結局のところ子育て負担の軽減が主目的となり、親が親としていかに発達していくかといった視点は欠落している。もちろん日本社会の現状を見れば、親（特に母親）に重くのしかかっている子育ての負担を軽減することは必要であり、重要な子育て支援であるには違いない。しかし、親が自ら親としての役割を認知・形成し遂行していくという親の発達が支援されなければ、一時的に育児不安が解消され負担感が軽減されるにすぎず、相変わらず子育ては苦行であり続けるのではないだろうか。

畠中は家族生活における人間性の回復という視点から家族支援の必要性を説き、特に子育て支援の必要性を強調している（畠中、2003）が、同時に「親子がきちんと向き合う」という視点が今日の子育て支援に欠落しているとも指摘する（畠中、2007）。彼は、子育て支援が親の負担の軽減として理解され認識されることによって、子育ての基本である「子どもと向き合うこと」が回避されているのではないかという問題提起をしており、現代の日本社会で必要とされている子育て支援は親子が向き合う環境を整備し保障することだと述べている。

親が子どもと向き合うということは、すなわち親役割を積極的に果たすということに他ならない。子育ての負担を軽減しながら、親の発達を促すという方向での子育て支援・親支援が求められているのである。

### (2) エンパワメントとしての子育て支援

従来型の子育て支援活動が親の育児不安や負担感の軽減を目的として、支援者（支援する側）主導の形で、親を受動的な対象と見なして行われてきたの

に対して、最近は「エンパワーメントとしての子育て支援」が考えられるようになってきた。

エンパワーメントという考え方は、市民運動や女性運動、福祉分野をはじめとして、最近では様々な分野で使用されるようになってきた。野島（2005）は、子育て支援・家族支援について保育士や幼稚園教諭などの保育者に求められる役割を整理するなかで、エンパワーメントとは「元々その人が持っている潜在的な能力を引き出すことで、その人の主体性を確保するプロセス」だと結論づけている。エンパワーメントとしての子育て支援とは、親を単なるサービスの受け手と見なし、一方的にサービスを提供するのではなく、子育て中の親のもてる力を引き出し、楽しんで子育てをしたり、より主体的に子育てに取り組んだりできるようにする支援である。

榎田らの研究（榎田他，2006）によれば、幼稚園児の保護者の多くは子育てに必要な養育力がある程度もっており、その力をパワーアップするために自らが興味や関心をもつことに打ち込む機会を求めており、心身を動かすワークショップへの参加希望も持っているという。親をエンパワーする子育て支援を目指すならば、親自身が参加し活動することによって親の潜在的な力が引き出され、主体性が高まっていくような支援や活動、いわば「親参加型」の支援や活動が求められるということになる。

では、親をエンパワーする親参加型の子育て支援として、具体的にどのような支援・活動があるだろうか。あるいは、どのような支援や活動を考えることができるだろうか。各地で親参加型の活動に熱心に取り組み、生き生きとした実践を積み重ねている保育園や幼稚園、子育て支援センターもあるのだが（大戸，2008）、それは各施設や指導者、そして参加している父母らの熱意と力量に大きく依存しているというのが実際のところである。

しかも日本の場合は「子育て支援」の専門家（「子育て」の専門家や「子ども」の専門家とは異なる）を教育し養成するというをほとんど行わずに、子どもの保育や教育が専門である保育士や幼稚園教員にそれを担わせようとしている。こうした状況では、親参加型の支援や活動を創り出そうという熱意をもって人がいても、試行錯誤しながら手探り状態でしか進めないだろう。「エンパワーメントとしての子育て支援」という目指すべき方向性は見えていても、その方向に力強く進んでいくための手立てがないという状況ではなかろうか。

### 3. カリフォルニア州のコミュニティ・カレッジと親教育

アメリカのコミュニティ・カレッジはその名の通り、地域住民のための、そして地域社会のための中等後教育機関であり、地域住民の高等教育・継続教育を受ける権利を全面的に保障し、地域社会のあらゆるニーズに応えることを使命としている。

現在、全米には1,173校<sup>1</sup>のコミュニティ・カレッジがあり、多種多様な教育サービスを提供しているが、子育てや親子関係に関する支援や教育も地域社会のニーズの1つであり、それに合わせるべく地域住民に対して親教育プログラムを提供しているコミュニティ・カレッジがある。その中でもカリフォルニア州は親教育をコミュニティ・カレッジの役割の1つとして明確に位置づけ、授業料を徴収せず無料で親教育プログラムを提供している。

#### (1) カリフォルニア州の先進性

従来から、カリフォルニア州はコミュニティ・カレッジの「先進州」（三浦，1985）だと言われてきた。カリフォルニア州で最初の公立短期大学（コミュニティ・カレッジの前身）が設立されたのは1910年であったが、それは合衆国内で初の短期大学というわけではなかった。しかし、カリフォルニア州におけるコミュニティ・カレッジ制度のその後の発展ぶりは他州の追従を許さないといっても過言ではない。

カリフォルニア・コミュニティ・カレッジ・チャンセラーズ・オフィス（州のコミュニティ・カレッジ全体を統括する機関）のウェブサイト<sup>2</sup>には、「カリフォルニアのコミュニティ・カレッジは国内最大の高等教育システムである。」と記載されている。これを具体的な数字で見ると、州内は72のコミュニティ・カレッジ学区に分かれており、カレッジ総数は112校、登録している学生数は290万人以上であり、確かに圧倒的な規模の大きさである。

カリフォルニアが先進州だとされるのは、何も規模の大きさについてだけではない。コミュニティ・カレッジの大原則である門戸開放政策（open door admission）、および総合制（comprehensiveness）の点でも先駆者である（三浦，1985）。

特に総合制の点では抜きん出ており、実に多種多様な教育課程・教育サービスを提供している。それは大まかに次の5つに分けることができる<sup>3</sup>。

- ① 2年制の教養教育（準学士課程）
- ② 4年制大学への編入教育
- ③ 短期・長期の職業技術教育
- ④ 地域社会のニーズに応じて提供される非単位（non-credit）で無料の地域住民教育



⑤趣味や教養，実学的な内容の各種の有料講座  
 このなかでも④の地域住民教育はカリフォルニア州のコミュニティ・カレッジの重要な役割とされており，その内容は州の教育法により以下のように定められている（広島短期大学・香蘭女子短期大学，2006）。

- ①育児，親子関係などの親として学ぶべき教育
- ②中等教育で学ぶべき読解，表現，数学などの基礎教育
- ③第二言語としての英語
- ④移民のための市民教育（英語，職業に必要な英語全般，数学，意思決定や問題解決の技術，特定職業の技能訓練を受けるための準備クラス）
- ⑤障害者のための教育
- ⑥雇用の可能性が大きい職業（見習いも含めて）に就くための短期教育
- ⑦高齢者教育
- ⑧家政教育
- ⑨健康と安全の教育

これらの教育プログラムは，州内のすべてのコミュニティ・カレッジで提供されているわけではなく，それぞれの地域のニーズに合わせて必要なプログラムが提供される。その地域のニーズに合致し，住民と地域社会にとって必要な教育内容であるからこそ，授業料は徴収せず無料で提供されるのである。

#### (2) コミュニティ・カレッジにおける親教育

こうした無料の地域住民教育の1つとして「育児，親子関係などの親として学ぶべき教育」が位置づけられており，いわゆる親教育が提供されている。コミュニティ・カレッジにおける親教育プログラムは，大まかに2つのタイプに分けることができる。

1つは，アメリカやカナダに見られる親参加幼稚園（Parent Participation Preschool）とか親協同幼稚園（Parent Cooperative Preschool）に類似したプログラムであり，週に1回程度，幼稚園で一般的に行われているような活動（音楽やダンス，物語の読み聞かせ，お絵かきや工作，外遊びなど）に親子が一緒に参加するとともに，親たちが直面している子育て問題についてグループ・ディスカッションを通して探求するといったものである。この親同士のディスカッションは親教育の専門家が指導する。なお，対象となる子どもの年齢は0歳から就学前までと幅広く，クラス編成も年齢別クラスのほかに異年齢クラスも編成されることがある。

もう1つのタイプは，親だけが参加する子育てプログラム（Parenting Program）である。これはカナダで開発されたノーバディズ・パーフェクト（Nobody's Perfect）やオーストラリアのトリプルP

（Positive Parenting Program）などの親教育プログラムを利用して行うものであり，プログラムによっては法廷命令（非行少年の親などに対して法廷が子育てプログラムを受けよう命令する）に合致するものもある。欧米においてはこうした子育てプログラムの開発とともに，これらのプログラムを実施する専門家の養成も盛んに行われている。

2009年秋の時点では州内の22校（表1）で親教育プログラムが提供されている<sup>4</sup>。すでに述べたように，州内のコミュニティ・カレッジは112校であり，そのうちの22校であるから，親教育を提供しているカレッジは約2割ということになる。割合としてはそれほど大きくはないが，それぞれのコミュニティ・カレッジはその歴史や地域性などによって力を入れている分野が異なるので，一概に親教育が盛んでないとは言えない。なお，フラートン・カレッジ（Fullerton）とパサデナ・シティ・カレッジ（Pasadena City）が州内で最大規模の親教育クラスを提供しているカレッジである。

表1 親教育プログラムを提供しているカレッジ

Allan Hancock	Mira Costa
Butte	Palo Verde
Canyons	Palomar
Compton	Pasadena City
Foothill	Porterville
Fullerton*	San Joaquin Delta
Gavilan	Santa Ana
Glendale	Santa Barbara City
Lake Tahoe	Santiago Canyon
Los Angeles Trade-Tech	Sequoias
Los Angeles Valley	Southwestern

\*提供を受けた資料ではNorth Orangeとなっていたが，これは学区名であり，カレッジ名はFullertonである。

#### 4. グレンデール・コミュニティ・カレッジにおける親教育

グレンデール・コミュニティ・カレッジにおける親教育の歴史は古く，最初に親教育クラスが開講されたのは約60年前に遡る。また親教育クラスに登録している親たちの団体としてグレンデール・カレッジ親教育会（Glendale College Parent Education Association：GCPEA）があり，1年を通じて様々な活動をしている。こうした点から，コミュニティ・カレッジでの親教育の事例として取りあげるのにふさわしいのではないかと考えて，2009年9月初旬に実際の親教育クラスの現場を訪問し，親教育部門の

責任者バーバラ・フリン (Barbara Flynn) にインタビューを行うとともに、資料の提供を受けた。

### (1) カレッジの概要

グレンデール・コミュニティ・カレッジは、カリフォルニア州ロサンゼルス市の北東約20キロに位置する人口20万人の都市グレンデールにある。カレッジのウェブサイト<sup>5</sup>によれば、1927年にグレンデール・ジュニア・カレッジとして設立され、1971年にグレンデール・コミュニティ・カレッジと名称を変更した。

キャンパスはグレンデール地域の谷を見渡すサン・ラファエル山の斜面に位置し、敷地面積は100エーカー (404,700㎡) であり、その中に15棟の校舎が立ち並んでいる。実際にキャンパスを訪れた時の印象としては、お洒落で雰囲気のある建物もあれば近代的なデザインの建物もあり、少し手狭なようにも感じたが、全体として立派なキャンパスだという印象を受けた。

学生数は、大学の単位修得のためのクラスに登録している学生が昼間クラスと夜間クラスを合わせて約25,000人、それ以外の成人教育プログラム（親教育プログラムを含む）や職業訓練プログラムなどを受講する学生は約10,000人である。

### (2) 親教育プログラムの概要

グレンデール・コミュニティ・カレッジの親教育プログラムは、1952年にトール夫人によって導入された。当初はわずか2クラスであったが、翌年(1953-1954)には9クラスにまで拡大され<sup>6</sup>、2009年の秋学期には、メインキャンパス及び6カ所のサテライト教室で合計32クラスを開講するまでになっている。また、これらの親教育クラスを受講する親は年間で1,200名以上に上る。

このカレッジで提供されているプログラムは、すでに述べた親子参加タイプ（親子が様々な活動と一緒に参加するとともに、親同士のディスカッションを行うタイプ）が中心である。2009年秋学期に開講された32クラス（表2）のうち1クラスを除いた全クラスが親子参加タイプであった。

ほとんどのクラスは働いていない母親と子どもを対象としているが、働いている親とその子どものために特別クラスとして夜間に1クラスだけ開講している。また、父親と子どものクラスも特別クラスとして夜間に1クラス開講している。また、メインキャンパスの中にある生活技能館（Life Skills Building）という名称の成人教育用の建物（写真1）で14クラスが行われ、残りの18クラスが6つのサテライト会場で行われている。各クラスは週に1回、全部で16回実施され、1回あたりは2～3時間のプ

ログラムになっている。



写真1 Life Skills Bldg.

親は毎回、必ず出席シートにサインをしなければならない。非単位 (non-credit) の成人教育クラスとはいえ、州の予算によって無料で提供しているクラスということもあり、出席は厳しくチェックされる。準学士課程や職業訓練課程などと同様に、州は各カレッジの学生数にしたがって予算を配分するので、学生数（受講者数）を正確に把握しておくことが求められるし、学生数（受講者数）が少ないと財政的に成り立たなくなってしまうのである。そこで親教育クラスの受講者も欠席する場合は必ず電話か電子メールでオフィスに連絡を入れることを義務付けられており、無断欠席が3回を超えると受講資格を失い、待機者リストに載っている他の親が新規受講者としてそのクラスに入ることになる<sup>7</sup>。

### (3) プログラムの具体的内容

子どもと親は、毎回同じスケジュールにそって各種の活動に参加する。たとえば、メインキャンパスで開講された2歳児クラスのスケジュールは以下のようになっていた。

<2009年秋学期・2歳児クラスのスケジュール>	
10:45-11:30	観察室 - 出席シートにサイン, 自由な遊び, 創造的活動
11:30-11:45	片付けと移動/親が子どもに物語を読む
11:45-12:10	絨毯タイム - 玩具での遊びは禁止
12:10-12:25	手洗いとおやつ
12:25-12:30	遊びとディスカッションへの移動
12:30-13:20	親のディスカッション
13:20-13:30	片付け
13:30-13:45	パラシュート/シャボン玉/ハンド・スタンプ/終了

表2 グレンデール・コミュニティ・カレッジ学区の親教育クラス (2009年8月31日～12月16日実施分)

クラス番号	年齢	会場	曜日	時間	インストラクター
PARED010#9770	0-6 ヶ月	LCF	水曜	2:45-4:45	Thomsen
PARED010#9773	0-6 ヶ月	LCF	金曜	12:30-2:30	Sternau
PARED010#9771	7-12 ヶ月	Life Skills	月曜	11:15-1:15	Reilly
PARED010#9779	7-12 ヶ月	Life Skills	火曜	8:30-10:30	Higgins
PARED010#9790	7-12 ヶ月	LCF	水曜	12:30-2:30	Reilly
PARED010#9778	13-19 ヶ月	Life Skills	月曜	8:30-11:00	Reilly
PARED010#9777	13-19 ヶ月	Life Skills	火曜	3:00-5:30	Atin
PARED010#9765	13-19 ヶ月	Life Skills	金曜	12:00-2:30	Higgins
PARED010#9791	2 歳	Life Skills	水曜	9:00-12:00	Flynn
PARED010#9819	2 歳	Life Skills	木曜	10:45-1:45	Flynn
PARED010#9793	2 歳	LCF	金曜	9:00-12:00	Grimes
PARED010#9782	2/3 歳	LCF	月曜	9:00-12:00	Flynn
PARED010#9817	2/3 歳	LCF	火曜	9:00-12:00	Higgins
PARED010#9794	3 歳	LCF	水曜	9:00-12:00	Vadman
PARED010#9796	2/3/4 歳	Life Skills	火曜	11:45-2:45	Vadman
PARED010#9818	3/4 歳	LCF	月曜	12:15-3:15	Flynn
PARED010#9805	就園前	LCF	火曜	9:00-1:00	Grimes
PARED010#9832	異年齢	Balboa	月曜	9:00-12:00	Sternau
PARED010#9822	異年齢	Maple	月曜	9:00-12:00	Stockly
PARED010#9834	異年齢	Cerritos	火曜	9:00-12:00	Stockly
PARED010#9785	異年齢	Life Skills	火曜	8:30-11:30	Vadman
PARED010#9825	異年齢	LCF	火曜	12:30-3:30	Gantus
PARED010#9830	異年齢	Muir	水曜	8:30-11:30	Panec
PARED010#9833	異年齢	Life Skills	水曜	12:15-3:15	Flynn
PARED010#9824	異年齢	Franklin	水曜	8:30-11:30	Grimes
PARED010#9831	異年齢	Balboa	木曜	9:00-12:00	Sternau
PARED010#9795	異年齢	Cerritos	木曜	9:00-12:00	Stockly
PARED010#9823	異年齢	Maple	金曜	9:00-12:00	Flynn
PARED010#9835	異年齢	Life Skills	金曜	8:30-11:30	Gantus
<b>特別クラス</b>					
PARED010#9826	働いている親	Life Skills	月曜	6:30-8:30pm	Gantus
PARED010#9827	Positive Parenting	Life Skills	水曜	7:00-9:00pm	Wright
PARED010#9828	父親クラス	Life Skills	木曜	6:30-8:30pm	Denhart



12時30分から13時20分までの親のディスカッション以外は、親子でいっしょに参加する活動である。自由な遊びや物語の読み聞かせなど、スケジュールに従いながら様々な活動を行う。「絨毯タイム」というのは担当教員が主導する活動で、絨毯の上にみんなで座って、歌やリズム、指遊び、フェルト板遊びなど、組織化された活動を行う時間である。

親子いっしょの活動においては、親の参加と親子の相互作用が強調され、また他者との関係において子どもがどのように社会性を身につけ発達していくかを観察し記録する機会でもあり、同時に、同じ活動に参加することで親同士のネットワークも形成され発達していく。

「絨毯タイム」が過ぎればおやつ時間であるが、おやつは当番の親が持って来る。子ども用と大人用の2種類があるが、子ども用のおやつについては細かい注意事項がある。栄養豊富なおやつ、たとえばミネラル・ウォーター（ジュース禁止）、全粒クラッカー、チーズやカット・フルーツなどを持って来ること、深刻なアレルギー反応を引き起こす危険性のあるナッツやピーナツバターを含んだものは持ってこないこと、砂糖を使ったおやつは決して持ってこないこと（パースデー・ケーキであっても不可）などである。こうした子どものおやつについての事柄も親教育の内容の一部である。大人用のおやつについては何でも好きなものを持ってきてよいが、しかし大人用のおやつを決して子どもに与えてはいけないことになっている。

おやつ後は親同士のディスカッションである。ディスカッション・ルーム（写真2）は、子どものプレイ・ルームと一続きになっており、ディスカッションの時間になると間仕切りを閉めて、大人用のおやつとコーヒーや紅茶を摂りながら話し合う。親教育担当教員があらかじめ作成したシラバスのテーマにそってディスカッションが行われるが、クラスのニーズに合わせてシラバスは適宜変更される。シラバスの一例として、同じ2歳児クラスのを以下に示す。

＜2009年秋学期・2歳児クラスの親同士のディスカッションのシラバス＞

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 ただ遊ぶこと
- 第3週 しつけ（その1）
- 第4週 自由討論
- 第5週 しつけ（その2）
- 第6週 しつけ（その3）／関心と成功例の共有
- 第7週 攻撃的な行動

- 第8週 おまるトレーニング
- 第9週 秋季仮装行列と持ち寄りパーティー／自由討論
- 第10週 ことばの発達
- 第11週 睡眠と食の問題
- 第12週 分かち合いと感謝
- 第13週 秋季収穫祭持ち寄りパーティー／自由討論
- 第14週 しつけ 受講生の学習成果
- 第15週 休日の伝統と家族ストレス
- 第16週 冬季持ち寄りパーティー／お菓子の家  
（クラスのニーズの変化に合わせてシラバスを変更）

2歳児の発達課題に合わせるように、3週にわたって「しつけ」がテーマとして予定されており、その他にも「攻撃的な行動」や「おまるトレーニング」など、日ごろの子育てのなかで困ったり悩んだりしやすいテーマが設定されている。自分ひとりで悩んだり不安がったりせず、親教育担当の教員から専門的知識等も得られるという点で、安心感を持って子育てに取り組めるのではないだろうか。毎回のディスカッションのテーマをすべて担当教員があらかじめ設定しているわけではなく、自由討論の日も3回設けてあり、重要なテーマであるしつけについてはディスカッションを通して親同士が関心を共有し、成功例から学びあうことができるようになっていく。また、仮装行列や収穫祭など、楽しみながら取り組めるような内容も組み込まれているが、これはGCPEA（親教育の親の会）の行事と一部連動している。



写真2 親のディスカッション・ルーム

親のディスカッションの時間には、子どもたちは戸外のプレイ・グラウンドで遊んだり、間仕切りで仕切った隣の部屋で遊んだりするが、このときはアシスタント職員と当番の親が子どもたちの安全に気

を配りながら様子を見守る。これによって、親たちは集中してディスカッションを行えるのである。

親のディスカッションが終わると、片付けをして終わりの活動に入る。シャボン玉遊びやパラシュート遊び、ハンド・スタンプなどを行うことになっているが、現地訪問をした日はパラシュート遊びをしていた(写真3)。親たちがカラフルな大きなパラシュートを広げて、ゆらゆらと揺らすのであるが、子どもたちはその下に入ってダンスをするように身体をゆすったり、楽しそうにクルクルと回ったりしていた。



写真3 パラシュート遊び

#### (4) グレンデール・カレッジ親教育会

そもそもこの会が発足したのは、グレンデール・カレッジに親教育クラスが導入された直後であった。クラス数が急速に拡大する中で、クラス間のよりよいコミュニケーションをはかる目的で設立された<sup>8</sup>のである。各クラスにはクラス代表と複数のクラスレポーターがいて、彼らを通じてクラス間のコミュニケーションを図り、クラスを超えた親同士のネットワークを形成する。

グレンデール・コミュニティ・カレッジの親教育クラスに登録する親は全員が自動的にグレンデール・カレッジ親教育会(GCPEA)のメンバーとなり、1年を通して開催される様々な活動に参加する。たとえば、収穫季祭や細菌教育(衛生教育)、昼食会などが開催されている。これらは正規のプログラムにおける親のディスカッションの内容と一部連動しており、正規のプログラムと呼応する形で親同士のネットワークを拡大する機能を果たす。

資金集めもこの会の主要な目的である。親教育自体は無料であり、授業料を支払う必要はない。担当教員やアシスタント、事務職員などの人件費はカレッジが支払い(州の予算)、最低限の文房具等も支

給される。教室も大学の建物を他の成人教育クラスと共同で使用するので料金はかからない。しかし、親教育クラスを実際に運営していくには、このほかにも費用がかかる。子どもたちが使うおもちゃを新しく購入したり、画用紙やクレヨン、紙コップや紙ナプキンなどの消耗品を購入したりするために資金を集めるのである。

この会と正規の親教育プログラムとの関係は他にもあり、冬学期の正規のプログラムの中には「親の会の政治学と実践(The Politics and Practice of Parent Associations)」というテーマのクラスが設定されている。その内容として、①親支援のネットワークを発展させる、②学校の多様な側面での親の参加を奨励する方法、③資金集めの方法などが予定されている。親教育クラスへの参加を通じて親をエンパワーし、親の会への参加を通じてもまた親がエンパワーされるような親教育を正規のプログラムとして提供するという形になっている。

#### おわりに

カリフォルニア州のコミュニティ・カレッジにおける親教育の特徴は以下のようにまとめられよう。

- ①親子が一緒に参加する活動と親同士のディスカッションを組み合わせた親参加型プログラムにより、子どもの心身の発達と親の発達を同時に図る
- ②親子間の相互作用を重視する
- ③親同士のサポートティブな関係づくりを図る
- ④親教育の専門家による指導と援助
- ⑤無料でのプログラム提供
- ⑥カレッジ教育ゆえの組織性・計画性・継続性

親としての発達を支援する子育て支援を考えるならば、子どもと親の相互作用を重視し、子どもの発達と親の発達を同時に支援するような方法がやはり重要だと思われる。また、継続的なディスカッションなどを通じて子育て上の問題を共有し親同士の関係づくりを図るという点や、「子育て支援」の専門家による援助という点も、今後の子育て支援・親支援を考える際に検討してみる価値があるように思う。

とはいえ、これらの特徴はコミュニティ・カレッジの親教育に特有のものというわけでもない。たとえば、包括的な家族支援プログラムとして有名なカナダのファミリー・リソース・プログラムも、親子の相互作用を重視する溜まり場(ドロップ・イン)活動に力を入れているし、親教育プログラムの提供、そして専門家による多様な支援を提供している。ア



アメリカでは20世紀初頭にはすでに親協同幼稚園 (Parent Cooperative Preschool) あるいは親参加幼稚園 (Parent Participation Preschool) といわれる親参加型幼稚園が誕生していた (Hewes, 1998)。コミュニティ・カレッジにおける親教育は特別に珍しいものでもない。

むしろ、カリフォルニア州の公的援助によって、全体として見ればかなり大きな規模で無料の親教育プログラムを提供できる (たとえばグレンデール・カレッジの場合でいえば1学期あたり1,200人を超えるほどの多くの親に支援を提供できる) ところがコミュニティ・カレッジならではの特徴と言えるのかもしれない。

また、良くも悪くも組織的で計画的であり、一定期間の継続性が保たれるので、効果的に働いた場合は大きな成果をあげることができるかもしれない。しかし、ファミリー・リソース・プログラムのように、いつでも気軽に、気が向いたときにというわけにはいかないの、コミュニティ・カレッジ方式では支援が届きにくいタイプの親がいるのも間違いない。

コミュニティ・カレッジの親教育プログラムをそのまま日本に持ち込めばいいと考えているわけではないが、今後の子育て支援・親支援のあり方を具体的に考えていくときの材料の1つとなるには違いないだろう。

- 1 アメリカコミュニティカレッジ協会 (American Association of Community Colleges) のウェブサイト (<http://www.aacc.nche.edu/Pages/default.aspx>, 2010年10月12日閲覧) より
- 2 <http://www.cccco.edu/ChancellorsOffice/tabid/179/Default.aspx>, 2010年10月12日閲覧
- 3 カリフォルニア・コミュニティ・カレッジ・チャンセラーズ・オフィスにおけるインタビュー調査より。LeBaron Woodyard (Dean, Academic Affairs and Educational Services), Vicki Warner (Specialist), Lynn Miller (Specialist), Chris Yatooma (Specialist)の4名に対して、2005年12月に実施。
- 4 グレンデール・コミュニティ・カレッジの親教育責任者 Barbara Flynn提供の資料より (2009年9月8日に訪問調査を実施)。
- 5 <http://www.glendale.edu/index.aspx>, 2010年10月12日閲覧
- 6 <http://www.glendale.edu/index.aspx?page=1177>, 2010年10月12日閲覧
- 7 グレンデール・コミュニティ・カレッジの親教育責任者

Barbara Flynn提供の資料 (Glendale Community College, Parent Education Department, Policies and Class Procedures) より。

- 8 グレンデール・カレッジ親教育会 (Glendale College Parent Education Association) のウェブサイト (<http://www.gcpea.org/GCPEA/Home.html>, 2010年10月8日閲覧)

## 文 献

- 宇佐美忠雄 (2006) 『現代アメリカのコミュニティ・カレッジ - その実像と変革の軌跡 -』 東信堂
- 榎田二三子・武山隆子・義永睦子他 (2006) 「親の養育力をエンパワーする環境構成の研究 - 附属幼稚園保護者の子育て意識調査を中心に -」 武蔵野大学人間関係学部紀要 (3)
- 大戸美也子 (2008) 『親参加型子育て支援活動の実態調査と担当者の専門性に関する研究報告書』 財団法人こども未来財団
- 柏木恵子 (2003) 『家族心理学 - 社会変動・発達・ジェンダーの視点 -』 東京大学出版会
- 斎藤真緒 (2006) 「今日における子どもをもつ意味変容 - イギリスにおけるParenting Educationの台頭 -」 立命館人間科学研究11
- 野島正剛 (2005) 「保育者のソーシャルワーク、カウンセリングと家族支援 - 親のエンパワメント -」 上田女子短期大学紀要28
- 畠中宗一 (2003) 『家族支援論 - なぜ家族は支援を必要とするのか -』 世界思想社
- 畠中宗一編 (2007) 『育児・子育てのなかの家族支援』 (現代のエスプリ479) 至文堂
- 広島文化短期大学・香蘭女子短期大学 (2006) 『学生の多様なニーズに対応した短期大学のコミュニティ・カレッジ機能充実に関する調査研究』 (平成17年度文部科学省「先導的・大学改革推進委託」事業報告書)
- 三浦嘉久 (1985) 「カリフォルニア州コミュニティ・カレッジの理念 - その形成と現代的諸問題 -」 鹿児島県立短期大学『人文』9
- Hewes, Dorothy W. (1998) "It's the Camaraderie": A History of Parent Cooperative Preschools, Center for Cooperatives, University of California

## 付記

本研究は、平成20～22年度科学研究費補助金 (基盤研究(C), 課題番号20530780) の助成を受けて行った研究の一部である。